

大陸（満州）

終戦前後と

内地生還までの記録

愛知県 岡本隆男

昭和十九年三月、召集を受け、四月、東京青山青年会館に集合、奉天第七五八九部隊（通信隊）に入隊。

昭和二十年七月、原隊を後に、所属中隊の尾曾曹長殿の副分任官の資格で、ソ満国境のチャムス方面の某地へ出張を命ぜられる。

任務は曹長殿が知るのみ。いずれ分かるだろうと聞きもしなかった。その日か翌日は忘れたが、チャムスに着き、指定旅館に入る。

その翌朝、まだ明けやらぬ四時半ごろ、突然大きな爆発音に眠りを覚まされ飛び起きた。窓から国境方面を見ると、真っ赤な炎が上がり、飛行機の爆音に続き爆弾の破裂する音が二度三度と立て続けに轟いた。

咄嗟にソ連の参戦と判断された。曹長殿の指示により、服装を整え点検し階下へ駆け下り、女中に頼んで握り飯と白米を軍足に詰め込み玄関に出る。

曹長殿は清算を済ませ既に待たれていた。宿の人に声を掛け、駅へ急行する。曹長殿は一言「牡丹江の本隊に合流する」とだけ言われた。列車はすでに停車していた。客車は三両で後に長い貨車が連結していた。

発車後一時間ほど走行したとき、突然爆音がして、敵機の攻撃を受ける。列車は名も知らぬ駅へ急停車した。止まると同時に二、三両先の貨車へ爆弾が命中し

た。曹長殿の指示でホーム脇の溝に飛び込む。直撃された貨車には爆弾が積まれていたらしく、すさまじい爆発音とともに次々と爆発が続いて起こった。

激しい怒りが込み上げてきて思わず「この野郎、ふざけやがって」と怒鳴る。

どのくらい時間が経過したか覚えていないが、爆破が治まり曹長殿と一緒に起き上がりて周囲を見渡すと、それは無惨な有様で駅舎は屋根が吹き飛び、自分自身無傷でいられたことが不思議に思えた。

けが人が呻いていたので、手当をしなくてはと走り寄る。赤十字の腕章を付けた人と看護婦が走って来たので安心した。曹長殿はけが人を任し、私を促して改札口へ向かった。

鉄道に沿って道路が延び、軍用トラック群が南下していた。その内の一台に便乗し、積み荷の上に腰を下ろした。どのくらい走ったか、曲がりくねった丘の下り道で、敵機の襲撃があり、私たちの乗った車がカーブを曲がり切れずゆっくり横転した。はずみで、私たちは道路脇に放り出された。

その際私は、荷物に尻の左側をはさまれ激痛を覚えた。痛さをこらえ起き上がると、曹長殿が「大丈夫か」と声をかけられた。「ハイ大丈夫であります」と答えた。激痛に耐えながら曹長殿に心配をかけまいと心に決めた。

運転手たちは、けがはないようだが、投げ出された荷物を茫然と眺めるだけで、私たちも手伝う術もないような状態であった。運転手の一等兵は曹長殿に謝りながら「後の事はご心配なく、あの車に乗ってください」と言つて、後続の車を指定してくれた。曹長殿も素直にそれに応え、車の荷台に這い上がり車に身をまかせた。

ときどき爆発音がし爆音が轟いた。鉄路にそつた道路へ出ると駅が見えた。

辺りはすっかり夜になって灯火管制下で真っ暗になっていった。深夜に牡丹江に着く。

中隊長殿への報告が終わった後、曹長殿にけがを打ち明けた。曹長殿は直ちに医務室へ連れていってくれ、深夜にも関わらず衛生兵に傷の手当を頼んでくれた。

血は止まっていたが、下着類は真っ赤に染まり、尻半分が青黒く変色していた。曹長殿は「よく我慢したなあ」と労りの言葉を掛けてくれたが「隠してはいけない」と叱られた。若い幹候の曹長殿を私は好きだった。一等兵のとき、当時の軍曹殿と撮った写真を、私は大切に内ポケットに入れていた。

翌朝点呼の後、部隊長殿以下部隊全員が集結していたことを知った。部隊の行動力の迅速さに内心舌を巻いた。

二、三日無為に過ぎたころ、だれからともなく、「部隊全員がシベリヤへ抑留される」と言う噂が立った。対照的に「北鮮の白頭山の山麓に日本兵が集結している」と言う噂も伝わってきた。

将校三、四名と兵十名くらい、離隊して北鮮の日本軍に合流するが加わらないか、と誘いがあった。捕虜即恥辱とと思っている私は、迷うことなくグループに参加した。その後、部隊長閣下から離隊の許可を得たことを聞かされた。

離隊行動は短時間で実行に移された。兵は背囊だけ

で帯剣は許されず、将校は佩刀と胴乱及び双眼鏡だけで、食糧の持参は許可された。

翌朝九時、グループの指導者たちが部隊長閣下に離隊の挨拶を済ませ、隊伍を組んで堂々と部隊を離れ南へ向かった。隊を出てからは三、四人一組になり、人目を避け、森林を選んで進んだ。地形によっては昼間は仮眠し、夜、行軍した。一週間くらい経って開拓団にたどり着いた。

私は体調を崩していたためか、その夜発熱とひどい下痢症状を起こし、夜が明けても高熱で起き上がることもできなかった。しかし、グループは私を置いて出発した。一刻を争うグループの行動は理解できた。出発の際に声を掛けてくれたが、ただうなずくだけの自分が情けなかった。開拓団の人たちは、親切に看護してくれた。その後何日経ったか分からなかった。国民を守るべき身が逆に介抱されていた。そんな状態の中で開拓団は、満人の集団掠奪を受けた。目ぼしい物は持っていかれ、私も軍服、軍靴、背囊と無くなった。

悲惨な状況の中で辛い快方に向かい、十月半ばころ起き上がることができた。日ごとに力も付き、玉蜀黍の収穫にも、手伝いができるようになった。

必死で修得した通信技術も国のために生かすこともできず、懺悔の念は、絶えず自分を責めていた。別れを行ったグループに未練は残らなかった。今はどんな苦しみにも耐えて生還し、力一杯働くことが社会に尽くす道と考えるようになっていた。

開拓団と行動を共にするか、単独行動するかで迷ったが、これ以上迷惑を掛けることは許されず、辛くても単独行動に踏み切る以外ないと決心する。開拓団の人たちは引き止めたが、病氣上がりの私への労りが、ありありと感じられた。揺れる気持ちを振り切り、十一月末別れを告げ、大連を目指し歩き出した。満人の日本人に対する掠奪も無くなり、避難民としか映らない私には、危害を加えられる心配もなく、宿泊を乞えば、納屋などへ泊めてくれた。寒さに耐えられないときは、焚き火で暖を取り、つらい一週間が続いた。

そのような中で、ある日、朝鮮人老夫婦の家で一泊

させてもらった。粟餅の飯を御馳走になり、その美味しきは格別で、何より嬉しかったのは老夫婦の親切さが心の中に滲み込んで、思わず涙が出た。

別れを告げて再び歩き出したその日、鉄道の踏切に出た。偶然にも、遙か遠くから汽笛が聞こえ、列車が驀進して来た。私は人影も無いホームに立った。どうか、止まってくれ、と心に念じながら。

列車は止まった。満鉄の大連行きであった。ドアが開き満人ばかり十人ほど降りた。急いで飛び乗った。

日も高い内に大連手前の国境で降ろされたが、運賃は取らなかつた。あのまま歩いていたら恐らく十日はかかっていただろうに、まさに天祐と言うべきか。

地元の満人は日本語が話せた。話によれば昨日も日本人が二十人ほど越境したと言う。道順も紙に書いて教えてくれた。監視人も、いるかないか分からないと言う。三時間は掛かるとも教えてくれ、今夜は月夜だから、できれば夜行が良いとも教えてくれた。

紙面の図を頼りに山越えにかかった。午後八時ごろだった。山道を辿って行くと案外早く山頂に出た。大

連の灯が直ぐ目の下に見える。月夜で足元は分かるが、どこに居るのか分からぬ監視の目を警戒しながらの下山は、寒さを感じず汗がだらだらと全身を流れた。一時間足らずで人家の灯が見えた。ホッと安心すると、今度は全身に寒気を覚えた。家の戸を叩くと、明かりがフツと消え返事はなかった。警戒されたのだと思い、また街の方へ歩を向けた。家並みが見え、明かりのついた一軒の戸をたたいた。返事がして、明らかに日本人とわかる顔が見えた。手短かに事情を話すと、何も言わずに家の中へ入れてくれた。

六十過ぎの老人で、満鉄に勤めていたと話してくれた。奥さんが仕舞風呂だが、よかつたら使ってくれと言われ、一カ月ぶりの風呂へ入った。垢が体裁が悪いほどボロボロと落ちた。風呂から上がったら粥が作ってあつて御馳走になる。福岡県出身で早く内地に帰りたいと話してくれた。息子が二人とも南方へ出征しているので毎日幸運を祈っていると奥さんは涙ながらに話をされた。心にジーンと響いてつらかった。疲れきっているのに寝つかれなかった。夜が明けけるのもど

かしく、朝食後、厚いもてなしに感謝の挨拶を済ませ、日本人会の事務所に向かう。

女性はほとんどスカートとハイヒールで、かつて東京で見慣れた風景と何ら変わらぬ様子に、しばし現状を忘れた。日本人会で、宿泊所の敷島小学校に連絡してくれた。部屋は二階の教室で、先客三十人くらいがいた。カマス二枚が毛布の代わりで、真ん中でつないであり、靴を履いた着衣のまま入り込んで寝るのだが、寒くて寝られたものではない。教室の中に備えてあるバケツの水が凍っているのだから、ウトウトするだけである。夜が明けると子供が死亡していた。翌朝も一人死んでいた。死人の衣類は全部剥がし、裸の死体はどこかへ埋めると言う。

その日、市内を歩いて見る。沙河口さががわ避難收容所の看板が目に入り、事務所を訪ねた。お寺の本堂が收容所に使用され畳であった。入所希望を申し入れると、直ぐ許可が出た。書類に所要事項を書き入れると、直ぐ案内され、毛布二枚を貸してくれた。敷島小学校へは

電話で連絡してもらい、在籍者一五〇人の中へ入れてもらった。風呂は週一回、毎日虱つぶしで半日は過ごす。

正月も過ぎて体力も回復し、小遣い稼ぎに苦力に出る。三月初旬、事務所から呼び出しがあった。顔を出すとしや人が二名椅子に腰を下ろしていた。嫌な予感がしたが、杞憂であった。塩田苦力十五名募集のためとわかって安堵した。旧大連塩業の塩田作業員と責任者の依頼で、渡りに舟と引き受ける。収容所の少年開拓団員全員が希望する。事務所へ名簿を提出、翌朝所長の点検と見送りを受け、電車で二十キロ離れた作業所へ向かう。

日本人事務員の説明を受け現場へ赴く。日本語の話をせる中国人から指導を受け作業に入る。以後、毎日その作業の繰り返しで塩を作る。

宿舎は現場の小屋掛けで、やがて夏も過ぎ、涼風が立つ秋になり、大陸の冬は足早にやってきた。宿舎の中も、火を焚く時間が多くなった。

十一月の初旬、その日は休業の日であった。私は釣

竿を担いで堤防に出た。強い北風を土堤下で避けて糸を垂れた。一時間ばかり過ぎたが手応えがない。寒さが増して諦めて帰ろうかと思ったそのとき、強い引きがあった。今まで経験のない引きに、必死でたぐり寄せると、五十センチもある鱸で、けがをしないよう足で踏みつけ持ち帰った。宿舎では皆が驚き「何か良いことでもあるんじゃないか」とだれかが言った。その暗示は当たった。夜八時ころ慌ただしい足音とともに日本人事務員が入り口に立った。

「皆さん引揚げの通知の電話が入りました。明朝、清算をするから荷物を纏めて事務所に来てください」と大きな声で知らせた帰って行った。寝ていた者も飛び起き、大きな喚声を上げてお互いに祝福があった。

沙河口へ引き揚げ、十カ月働いた甲斐があつて小金もでき、街へ出て小ザツパリした服装も整え、あとは出航を待つばかりである。

第一回引揚船に乗船したのが昭和二十一年十二月十五日ころで佐世保に入港したが、十二月十八日と記憶している。